

現代新宗教におけるカリスマの生と死

——高橋信次と GLA の研究——

沼田 健 哉

1.

新新宗教と呼ばれる教団の中で、GLA は信者が少ないにもかかわらず著名な存在である。その要因の一つとしては、初代の高橋信次（本名春雄）が、カリスマ性に富んだ、個性豊かな教祖であることがあげられる。

カリスマに関しては、すでに他の論文において概括的考察を試みたので、以下においては、限定した事項に関して言及することにした。¹⁾

ウェーバーによれば、カリスマとは以下の如きものとされる。それは、「非日常的なものとみなされた（元来は、予言者にあっても、医術師にあっても、法の賢者にあっても、狩猟の指導者にあっても、呪術的条件にもとづくものとみなされた）、ある人物の資質をいう。この資質の故に、彼は、超自然的または超人間的または少なくとも特殊非日常的な、誰でもがもちうる

1) 沼田健哉「新宗教研究におけるカリスマ論」『桃山学院大学社会学論集18巻1号』桃山学院大学総合研究所，1984年，29—59頁。

沼田健哉「現代日本における新宗教の諸相—カリスマを中心として—」『桃山学院大学社会学論集19巻1号』桃山学院大学総合研究所，1985年，1—30頁。

なお、カリスマ概念に関する概括的な言及としては、Hill, Michael, 1973, *A Sociology of Religion*, London: Heinemann Educational Books, pp. 140-182があげられる。

マックス・ウェーバーのカリスマ論の全体像を知るには、Max Weber, *ON CHARISMA AND INSTITUTION BUILDING*, Selected Papers, Edited and with an Introduction by S. N. EISENSTADT, 1968, THE UNIVERSITY OF CHICAGO PRESS, CHICAGO AND LONDON があげられる。

とはいえないような力や性質を恵まれていると評価され、あるいは神から遣わされたものとして、あるいは模範的として、またそれ故に『指導者』として評価されることになる。』²⁾

そして、支配形態としての特色としては、以下のことがあげられる。「カリスマ的支配は、支配者の人と、この人のもつ天与の資質（カリスマ）、とりわけ呪術的能力、啓示や英雄性、精神や弁舌の力、とに対する情緒的帰依によって成立する。永遠に新たなるもの、非日常的なるもの、未曾有なるものと、これらのものによって情緒的に魅了されることが、この場合、個人的帰依の源泉なのである。』³⁾

このように、カリスマの特性としては、伝統に対する革新の機能があげられる。「カリスマは、そもそもがその特有の影響力を発揮する限り、逆に、内部から被支配者の意識の中核的『心情変化』 „metanoia“ から、その革命的力を示現する。……カリスマは、その最高の現象形態においては、およそ規則や伝統一般を破砕し、一切の神聖性概念を端的に覆滅する。それは、古来慣行的なるもの、したがって神聖化せられたるもの、に対するピエテートの代わりに、いまだかつて存在せざりしもの、絶対的に無類なるもの、したがって神的なるもの、に対する内面的服従を強制する。』⁴⁾

ところで、信次を論じるにあたっては、そのカリスマの形成に関与した、彼の社会的存在に言及する必要がある。彼は、いわれのない差別を身に受け「既存の社会的位階秩序の外あるいは底辺に立っている層」(die außerhalb oder am unteren Ende der sozialen Hierarchie stehenden Schichten)の一員である故に、ある程度「その社会の諸慣習に対してアルキメデスの点に立っている。」(auf dem archimedischen Punkt gegenüber den gesellschaftlichen

2) Weber, Max, 1956, *Wirtschaft und Gesellschaft, Grundriss der Verstehenden Soziologie*, vierte Aufl, besorgt von Johannes Winckelmann, Tübingen: J. C. B.

Mohr [世良晃志郎訳『支配の諸類型』創文社, 1978年, 70頁]。

3) Ibid. [世良晃志郎訳『支配の社会学I』創文社, 1965年, 47頁]。

4) Ibid. [世良訳『支配の社会学II』創文社, 1964年, 413頁]。

Konventionen stehen) したがって、彼は、「その慣習に拘束されずに、世界の意味に関するオリジナルな立場決定を下すことができるし、物質的利害への顧慮に妨げられない、強烈な倫理的・宗教的パトスを発展させることができる。」存在だったのである。⁵⁾

また、この事実に関連し、信次を考察の対象とする際には、苦難の神義論も一つのポイントとなる。ウェーバーは、神義論について以下のように記している。「社会的な名誉と権力をしっかりと握っている社会層は、その身分にまつわる伝説を、自分たちには生得の特別な資質——たいていは血統という資質——があるというかたちに作り上げていくのがふつうである。つまり、彼らの自尊心を育てるものは、彼らの（現実にそうであるにせよ、あるいは自らそう称しているにせよ）存在 Sein なのである。これに反して、社会的に抑圧されている、ないしは、身分上マイナスの（あるいは、少なくともプラスではない）評価をうけているような社会層は、自分たちに委ねられた特別な「使命」Mission への信仰によって自尊心をもっとも容易に養うことができる。つまり、彼らに独自の価値を保証あるいは構成するものは、彼らの当為 Sollen ないしは彼らの（機能的な）業績 Leistung であり、したがって、そうした独自の価値は彼ら自身をこえて彼岸へと移行し、神によって課せられた「責務」Aufgabe となっていく。」⁶⁾

ついで、GLA の研究においては、信次から二代目長女佳子への継承が重要なポイントとなる。この点に関連しウェーバーは、カリスマの日常化によって決定的なのは、後継者問題という、観念的および物質的理由から、焦眉の急を要する問題の解決の仕方いかんであるとする。その方法には以下のようなものがあげられる。

5) M. Weber: *Wirtschaft u. Gesellschaft I*, S. 290.

折原浩『危機における人間と学問』未来社、1969年、192頁。

6) Weber, Max, *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie*, 3 Bde, 1920-21 [大塚久雄・生松敬三訳『宗教社会学論選』みすず書房、1981年、51頁] なお、神義論に関しては、Peter L. Berger, *The Social Reality of Religion*, も参考になる。

(一)カリスマ的資格の諸標識にしたがって〔後継者を〕物色することによって。

(二)神託・籤・その他の指名技術によって。

(三)カリスマ的資格をもつものを指名することによって。

(i)カリスマ保持者自身による指名，すなわち後継者指定。

(ii)カリスマ的資格をもつ使徒団または従士団による指名。

(iii)カリスマ的資格は血の中にあるという観念にもとづく「世襲カリスマ」によって。

(iv)カリスマの典礼的非人格化によって。

(v)カリスマ的正当性の原理が，反権威主義的に解釈変えされる場合。⁷⁾

また，ウェーバーは，カリスマの「没主観化」に言及し，そこではカリスマは，厳に人的な天与の資質たることをやめるとする。それは，「あるいは(一)譲渡可能な，あるいは(二)人的に取得可能な，あるいは(三)1人の人自体に付着することなく，人物のいかんにかかわらずある官職の保有者またはある制度的な組織に結合されるごとき，一つの資格に転化する。」⁸⁾ それらの例としては，家カリスマ，氏族カリスマ，さらには，特定の社会制度そのものが特殊な恩寵を受けているという信仰にもとづく，官職カリスマ等があげられる。

なお，二代目佳子による継承時における運動は，スター崇拜の要素を含んでいた。この現象に関連し，ウィルソンは以下のように述べている。「技術的，世俗的社会という背景においてすら，カリスマ的なものを強く思い起こさせるような類型の追従者との関係を，確立しうる人物がいまだに存在する。……その現象には確かに，人気のある芸人，とりわけ若者たちの大量の観衆を伴う，若い芸人が持っている大衆的魅力がある。これらの芸人たちについて用いられる言語は——おそらく言語的鑄造物の広告業者による品質低下の結果があつてのみ——カリスマの言語に反映する。彼らは偶像 (idols) であ

7) Weber, Max, op. cit. [世良訳『支配の社会学Ⅰ』52—56頁]。

8) Ibid. [世良訳『支配の社会学Ⅱ』466頁]。

り、彼らの行動は呪術であり、彼らの資質は空想的で伝説的である。……彼らの公演の時の個人的忘我状態や集団的熱狂の表現は、おそらく過去のメンアの主張者が受け入れられた時の状態をしのぐものであろう。……つまり、彼らは並はずれた社会的喝采の受容器にすぎず、また並はずれた心理的反応の刺激器にすぎない。……カリスマは今や面白いからにすぎない。したがって、その観客は追従者であるよりも、むしろファンである。」⁹⁾

さらに、現代においては、マスコミを中心とするコミュニケーション手段とカリスマの関係が問題となる。この問題に関し、カール・レーヴェンシュタインは、「大衆への影響力が、純粋なカリスマに依存しているところでは、ラジオとテレビは、このカリスマを従来経験しなかったほど広汎に伝達し、具体化することが可能なのである。」¹⁰⁾ とする。

ついで、セルジュ・モスコヴィッシも、「しだいにマス・メディア、広告業者、新聞記者、その他の人々は、カリスマを生まれながらに持つ人々の中にそれを求めるのではなくて、カリスマを製造しようと努力するようになる。そして、ある場合にはそれに成功する。」¹¹⁾ としている。

さらに、GLA を研究するに際し重要なのは、カリスマの統制の問題であると言えよう。その失敗が、教団の分裂を生ぜしめた事は、過去の多くの教団の歴史によって知ることができる。

これらのウェーバーを中心とする諸理論を前提として、以下、高橋信次と

-
- 9) Bryan, R. Wilson, *The Noble Savages: The Primitive Origins of Charisma and Its Contemporary Survival*, University of California Press, 1975. [山口素光訳『カリスマの社会学—気高き未開人—』世界思想社, 1982年, 169—171頁]。
なお、現代におけるスターの社会学的分析としては、Edgar Morin, *Les stars, Éditions du Seuil*, 1972 があげられる。
- 10) Karl Loewenstein, *Max Webers Staatspolitische Auffassungen in der Sicht unserer Zeit*, 1965, Athenäum Verlag. Frankfurt am Main, Bonn. [カール・レーヴェンシュタイン・徳永新太郎訳『マックス・ウェーバーと現代政治』未来社, 1967年, 120頁]。
- 11) Serge Moscovici: *L'âge des foules; Un traité historique de masses*, Fayard, Paris, 1981 [セルジュ・モスコヴィッシ・古田幸男訳『群衆の時代』法政大学出版局, 1984年, 467頁]。

GLA に関し、カリスマを中心として言及することにする。

2

GLA の初代教祖である高橋信次は、1927年9月21日長野県佐久高原の農家に生まれた。幼くして死んだ2人を除くと、10人の子の中で男3人女7人の真中で次男として育った信次は、兄妹の中では恵まれた幼少時代をすごしたとされる。¹²⁾

信次の家は、貧しくはあったが最下層ではなく、両親はよく働いて10人の子を育てた。GLA においては、すべての会員がそう信じているわけではないが、信次の父は過去世が釈迦の父であるストダーナであり、母はキリストの母であるマリヤとされている。

また、肉体の先祖としては、14代前に頼朝の子孫である竹之丞半九郎友幸がおり、武田信玄の軍門に下ったとされている。信次は、幼少期において、いわれのない差別を受け苦しんだという。この事実、その後の信次の一生を、大きく規定したと言える。¹³⁾

母は、信次達に対し、人間は心が大切であり、人のためにつくすべきであると教えたとされる。そのためもあってか、信次の家には乞食や物貰も出入りし、母は、みんなから「生き神様」と呼ばれていたという。

信次は、幼少期から靈感に優れていたようであり、「誰其の家に行ったら

12) 以下の信次に関する論述は、主として、高橋信次『心の発見現証篇』三宝出版株式会社、1983年、6—104頁。

高橋信次『心の発見神理篇』三宝出版株式会社、1982年、16—99頁、ならびに、姉・妹・弟らの言による。

13) 信次のいわれのない差別の体験に関しては、信次が4日で書いたとされる、自伝的色彩をおびた小説『愛は憎しみを越えて』三宝出版株式会社が間接的資料となる。信次は、弟子の1人である観音寺住職村上有快に、この著書に書かれているような差別を多く受けたと語っている。この書の中には、以下のような文がある。「お前は人間じゃないといって、お友だちの五郎と2人でいた縁側から、僕を突き落として石をぶつけたんだ。……お前は俺のことを聞かなくてはいけない奴隷なんだ。牛だ、馬だって——。……僕、いつもいじめられてばかりいるよ。もうここにいるのは、いやだ、いやだ」。

幽霊が出てきた。」とか、「誰誰さんの家は、将来バラバラになる。」といった事を、家族に語っていたという。そのためもあってか、家族の中にあっても特別視されており、生まれつきの霊能者とも言うべき存在だったようである。

信次は、10歳の時の9月に原因不明の病気にかかり、幾度か死線を越えるという体験をくり返した。それは、毎夜8時になると定期的に呼吸が止まり、心臓が停止して五体の自由を失ってしまうというものであった。その時に信次は、いつしか「もう1人の私」となって肉体を脱け出し、自分を抱いている母と「肉体の私」の様子をみているようになった。このような発作を信次が続けるようになると、父は、干社詣りをしたり、信次に対し鍼灸を行ったりした。しかし、信次の「もう1人の私」は、家族の心配をよそに肉体から脱けて、美しい自然のみられる世界で自由に遊んでいた。信次は、そこですでに亡くなっている人々と話をしたり、大きな建物の中を見学したりしたが、そこには世界中の人々が生活していた。¹⁴⁾

この病気は6ヶ月ほどで治ったが、それを境に信次は、家の近くにあった権現様と呼ばれる村の小さな社にお詣りするようになった。それは、健康の祈願と「もう1人の私」とは誰であるかという疑問を解くためであった。4年・5年とお詣りは続いたが、神とは何か、祈りとは何かというような疑問は解決することはなかった。

なお、信次の家は曹洞宗であったが、その影響はみられない。そして、信次が近所の成田山へ詣でた時、見知らぬ旅僧に行き会うという事があった。その時に僧は、信次の頭をなでながら、「病気のことは心配するな。近々に治る。お前の眼は二重孔である。一生懸命に勉強すれば必ず霊力を持つようになる」と語った。さらに、その後別な僧が、「心というものが、すべて

14) この幽体離脱の現象に関しては、A Scientific Study on Out-of-Body Experiences (笠原敏雄編・著『靈魂離脱の科学』叢文社、1983年)が、多くの示唆を与えてくれる。

の元である」と信次に教えたりすることもあった。このように、信次の家には不思議と旅僧の来訪が多く、彼に対し正しい心を教えていった。

信次は、勉強はそれほど好きではなく、むしろ神仏の話に強くひかれていたが、成績は優秀な方であった。そのため、平賀小学校を卒業した信次は、野沢中学（現在の野沢北高等学校）に入学することができた。

そこで体力を鍛えるために始めた剣道は、彼の人生に大きな転換をもたらした。剣道の極意は、気・剣・体の一致であり、その修行を縁として、心身の浄化を計ることが本来の姿である事を信次は学んだ。

その後信次は、中学を2年で中退し、軍人になるために陸軍幼年学校に入学した。ついで、航空兵となり各地を転戦したが、幸運にも一命はとりとめて終戦をむかえた。

戦争中に信次は、12時間海を漂い海防艦に救われた経験を有しているが、その際、イルカが多数そばに寄ってきてくれたため、米軍の機銃掃射を受けずにすみ、命が助かったと自ら語っている。

信次の体内には、弾丸の破片が残っていたというが、彼が軍隊で得たものは、社会の一員としての犠牲的精神と行動であったとされる。しかし、信次は、戦争の悲惨さを身にしみて味わい、特定の国家思想に支配された思想による犠牲は、人生の目的や使命であるはずがないことを覚っていたという。

復員後、田舎から東京へ上京した信次は、苦学しながら大学入試の認定試験を通過し、その後大学で学んだ。彼は、主として日大工学部電気学科で学んだが、一時期東大にも通って勉強したとされる。しかし、卒論がやや規格はずれであったため教授の不評を買い、卒業資格を得ることができなかったようである。信次は、電気工学の外にも、物理学・天文学・医学・化学等をも学び、それが後のGLAの教理の形成に大きく関係している。

彼の日常は、神仏の話題が多かったために、学友に「変り者の予言者」などと呼ばれ、異常者扱いをされたりもした。しかし、一方では、試験の山の予測もきわめて上手であった等の理由により、「神様」もしくは、「仏様」

とも呼ばれていたとされる。

信次は、仏教やキリスト教の本はあまり読まなかったようであるが、現在のオカルト雑誌「ムー」に相当する雑誌を読み、「天と地とを結ぶ電話」等の靈的な本を読んでいたとされる。

信次は、「もう1人の自分」を求め続け、なんでも自分の眼で見、聞きし、神秘の世界に関する探求を止めなかった。彼は、禅定して瞑想に耽ってみたいり、僧侶にいろいろ質問したり、キリスト教の教会へ行ってその説教を聞いたりもした。しかし、信次は、いずれにも納得がいかず、しだいに既成宗教に失望していった。

彼は、実弟の興和（1941年3月21日生まれ、中央大学卒業）と世界真光文明教団を見学に行ったこともあり、多くの新宗教教団を探訪したようであるが、やはり、そのいずれにも満足できなかったようである。

信次は、心霊科学にも関心をもち、小田秀人らと親交があり、氏の主宰する「菊花会」の会員でもあったようである。¹⁵⁾ 2人の関係が、どのようなものであったか未だ明らかではないが、信次は、心霊科学から多くのものを吸収し理解の手がかりとしたようである。

事業の方に関して言えば、働きながら大学で学んでいた信次は、25歳の時、電気関係の仕事をするため小さな工場を借りて、独立自営の第一歩を踏出した。その後二回事業に失敗したが、そのうち一回は、当時平和相互銀行の頭取であった小宮山英蔵に助けられて再興した。上野の地下道で4日程過すという経験までした信次は、やがて、コンピューター端末機器を製造する高電工業株式会社を設立し、同社および八起ビル管理株式会社の社長を兼ねるに至った。

1954年12月に信次は、日本橋の電器店で働いていた一栄（旧姓市川、1934年1月8日生まれ、熊谷の青果商の娘）と結婚した。この前後から不思議な

15) 小田秀人・田宮馨『対談四次元の不思議』潮文社、1973年、189—190頁。

現象が始まり、信次の予言はほとんど適中し、相談にくる人が多数いた。

そして、1968年には、ついに多くの現象が生じるに至った。2月3日に、風の入ってこない室内において、ローソクの炎がきわめて大きくなり、ついで、それが蓮の華の形に変化し、最後には蓮の実の形に変わるということがあった。

ついで、7月3日、信次が妻の弟の心を調和して光を手のひらから送っていると、義弟の口から昔の侍の声が出てきて語り出した。7月7日には、義弟に入った霊が、「私は^{かろがみ}上々の^{かみ}上の上の上に立つ神だ。お前達は、この男（義弟）にひれ伏して私のいうことを良く聞くが良い」として、信次をきびしく叱ることがあった。そして、義弟を通じて、「ワン・ツー・スリー」と名乗る指導霊と、「フワン・シン・フワイ・シンフォー」と名乗る守護霊が現われた。

その後で守護霊は、信次に対し3日のうちに悟れという要求を出した。彼は、高野山の修行僧や上野の寛永寺の古宇田老師、さらには、下総の中山寺にまで行って教えを受けようとした。これらの人々からは、ついに明確な答が得られなかったが、謙虚で執着を捨てた心、さらには悪を善に変える慈悲の心になった信次は、一種の悟りに達し、自らの使命と目的を自覚するに至った。

その後、7月末まで義弟を通して行なわれていた、次元の異なった世界からの通信は送られなくなった。そして、信次に対する教えは、守護霊や指導霊達から直接行なわれるようになった。

9月18日には、妹の星洋子（1935年生まれ、水産業従事者と結婚し後に離別）に観世音菩薩が入り、彼女は転生輪廻の過去世を思いだすに至った。ついで、10月23日には、妻にマイトレイヤーが入り、妻はインドの古代語で過去世のことを語りだした。

これらの現象を通じて、信次が抱いてきた「もう1人の私」とは何かという謎は、肉体から抜け出した自分自身で、あの世に帰る時の、新しい肉体

(光子体)を持った私であるとして解明された。心の曇りがなく調和されている時、信次の身体の周囲は光によって満たされ、ドームのような光明が次元の異なった世界にまで通じるように感じられたという。彼は、心を調和させれば瞬時にして世界中の至るところに肉体から抜け出して行くことができた。

やがて、これらの話が外部に洩れ、多くの来訪者があるようになった。信次は、守護霊から神理(絶対の理)の記録を完了するように言われ、その骨子が完成した時、指導霊に聞いて批判を願った。その時に、「ワン・ツー・スリー」は、モーゼで、「フワン・シン・フワイ・シンフォー」は、イエス・キリストであることが明らかとなった。

そして、守護霊は、この事実をそれまで明らかにしなかった理由を、「お前にイエスだのモーゼだのといえ、聖書やユダヤ経、十戒を読みあさり、塵と埃りにまみれた現代版を、そのまま暗記してしまうことを考えたからだ」として、旧来の陋習を破り、新しい教理を形成することの大切さを指摘した。こうして創出されたのが、GLAの経典とも言うべき「心行」である。

そして、10月頃には、毎土曜日に、6、70人の人々が、興味からか、あるいは神理を求めようという目的によって信次の家へ集まってきた。

ついで、11月24日、信次は、霊界において、現代と古代の人が入り乱れた万国の人の前で1時間半ほど講演をしたという。その後、信次や妻や妹は、毎夜のように守護霊や指導霊の教えを受け、いろいろの事を学んでいった。

なお、信次と興和と星洋子は、その当時、空飛ぶ円盤を見るという経験を、さらに、信次の部屋にモーゼとキリストが訪ずれ、信次と握手を交したとされる。

1969年4月には、毎土曜日百人近くの人が集まるようになったので、浅草に建設中のビルの3階のフロアを開放することにした。そして、釈迦の誕生日である4月8日に、「大宇宙神光会」を発足させ、第1回講演会を行なった。

1970年12月2日には、会名を GLA に変更したが、これは、God Light Association の略である。

ついで、1973年には宗教法人となり、霊友会から分派した「瑞法会教団」が帰依し GLA 関西本部となるに至った。

その後、他教団の幹部の参入もあつたりして、教勢は順調に拡大したが、1976年に至って信次の健康が悪化するという事態が生じた。同年3月の白浜の研修会において信次は、自己をエル・ランティーであるとし、さらに長女佳子の位置づけを示唆した。その時信次は、講師達に別れを告げているようであり、自己の死を予期していたと推測される。その後、病気をおして、東京本部主催の青年研修会、さらには東北での研修会に参加した後、6月25日信次は死去した。

彼は、以前から48歳の時生命にかかわることがあると予告していたが、そのあまりに急激な夭折は会員に動揺をもたらした。しかし、それは、肉体を脱ぎすててあの世へ帰り、更に自由で偉大な魂として、この世の人々を導いていく使命を果すためである等の説明により克服された。

信次の死んだ翌年、長女の高橋佳子は、自己が大天使ミカエルであると宣言した。彼女は、1956年10月24日生まれであり、東京都立九段高校を経て、信次死去の当時は、日本大学文学部哲学科に在学中であった。佳子は、高校時代フォークソングのサークルに属しており、ある時その種のコンサートへの出場依頼を受けたこともあったという。

このミカエル運動は、佳子のイニシユアティヴのもとに始められた。その一つには、若手の講師からなる「ミカエル・ウィングス」の形成もあり、SF 作家の平井和正がスタッフとして参加した。¹⁶⁾ 彼らは、ミカエルの親衛

16) 平井和正と GLA の関係は、平井和正『高橋留美子の優しい世界』徳間書店、1985年により伺うことができる。それによれば、「『幻魔大戦』という巨大物語は、彼女との半年間にわたる“ミカエル学校”の産物以外の何ものでもないのだ。」とされている。

隊的組織・MBG（ミカエルボーイズアンドガールズ）を形成し、全国にミカエル旋風を起こそうと試みた。

この運動のきっかけの一つには、『真創世記』3部作の発刊が挙げられる。その販売促進計画も関連してマスコミとの接近も行なわれた。しかし、意図したような成果は生ぜず、その後、佳子がミカエルであるという主張は、顕在化せず現在に至っている。

このミカエル運動の過程において、年輩の講師をはじめとして多くの会員が脱会する事態も生じ、現在公称の会員数は1万4千人である。

GLA から脱会した中で比較的大きな集団を形成しているものとしては、信次の著書を出版していた三宝出版の代表者であった堀田和成の「偕和會」、GLA 西日本本部長であった園頭広周を代表者とする「正法会」があげられ、それぞれ千名以上の会員を有している。さらに、波場武嗣の「意識教育研究所」、渡辺泰男の「光のグループ」、千乃裕子を中心とするグループ等、各々自らをリーダーとする一派を形成していった。それ以外にも、信次の本を集まって勉強する小さなグループは多数あり、その総体は把握できないのが現状である。

最近の GLA は、マスコミに対し消極的であり、会員の人数を増やすことに対しても積極的な姿勢はみられない。しかし、現有の会員に対しては、きめ細かい指導を行なうよう努力しており、様々な研修システムも用意されている。

3

高橋信次によって形成された GLA の教義は、日本の他の教団にはみられない独自性を有している。その教義を論じる際には、彼が理科系出身の企業経営者であることを考慮すべきである。

彼の説く教理は、時を追って変化がみられるが、まず彼の最初の著書である『大自然の波動と生命』をみると、全体が、「生命論」「物質論」、「現象論」

の3編より構成されている。¹⁷⁾ その中において、大自然は、3つの組み合わせから成っているとすする三体理論が展開されている。それによれば、地上の成因は、気圏・水圏・岩圏から構成されており、原子は、陽電子・中性子・陰外電子から、電気の性質は、陽性・中性・陰性の3つからできている。さらに、地球も、太陽・月との関連において地球自身の目的を果たしている。そして、現象論においては、1・2・3の基本数を用いて、人の運命・性格・職業・家庭問題等に言及している。人間は、生命体であるが、この地上に存在するかぎり、大自然の組み合わせからぬけることのできない存在とされている。

このように、信次独自の運命論が展開されている本であるが、易者や占い師が利用したこともあって、後に絶版にされた。ついで、初期の著書としては、『天使の再来』があげられるが、信次の主著は、『心の発見』3部作と、『心の原点』である。以下、信次の主著に主としてよりつつ、その教説に言及する。

まず、彼は、人間の地上における目的は、各人の心の調和と、地上の楽園、仏国土、ユートピアの建設にあるとする。それも、人間自身が神仏の子であるからである。人間の歴史は、2億年以上前にさかのぼり、その時人類はすべて他の天体からこの地上に降り立った。当時の人びとは調和がとれ、地上は仏国土そのまま、人びとの年齢は5百歳、千歳を保ち、年もとらずにあの世とこの世を自由に行ったり来たりしていた。その当時には原罪はなかった。しかし、しだいに地上の生活になれた人類は、あの世との交信が途絶え、五官・六根に振り回され、罪をつくりはじめた。かくて、人類の目的は、心の調和ならびに神の心に帰る修行と、2億年以上前の仏国土、神の国を再びつくることとなった。なお、神とは大宇宙を支配する大意識であり、仏とは、神の大意識と不離一体の境涯となった悟った人間をいう。

17) 高橋信次『大自然の波動と生命』第十五興生社出版部、1969年。

ところで、現象界（この世）は、善と悪、調和と不調和の諸現象が同居している社会である。これに対し、実在界（あの世）は、天上界・地獄界に大別されて、善悪がはっきりと区分されている。その世界の区分は、以下のようになっている。

一 如来界（上段階光の大指導霊）

この世界は、心の調和度によって神仏と表裏一体であり、この現象界と実在界の支配者の世界で、「光明の世界」という。釈迦・イエス・モーゼ、すなわちアガシャー系グループといわれている上段階光の大指導霊の世界で、仏教的には、金剛界とも如来界ともいわれている。指導霊達は、大宇宙即一体の心を持ち、すべてにこだわりのない、万象大調和を根本とした社会をつくり、この世とあの世を支配している。

二 菩薩界（上段階光の指導霊）

ここでは、如来界とほとんど変わらない社会生活が営まれている。指導霊達は、現象界と実在界の指導とともに、自分自身もまた生活の中で修行をしている。

三 神界（光の天使）

さらに一段低い霊域の世界であり、学者のように、智で悟って実在界に帰った天使達が生活している。この現象界で肉体舟に乗って修行している人々の、研究努力に協力している光の天使達の世界である。

四 霊界

芸能関係やスポーツ関係、または、思想的な小集団にいた住人達の非常に多い世界である。人類は皆兄弟というように一つの世界に進展されているところで、幽界より精妙化され、霊域が高い。また、生命の分身や本体が現象界へ出ている場合は守護霊ともなる。霊界には、幽界より進化してきた生命も多く、あの世では、霊界人と幽界人の数が最も多い。

五 幽界

一般に天上界の入口の上下の段階が、霊の調和の度合によりつくり出され

た世界である。この現象界と同様に、自分自身で望んだ人々の集団により形成される各国が存在している。現世と異なるところは、戦争のない調和された社会組織となっていることと、経済がバーター制（物々交換）をとっていることである。各自が己自身に足ることを良く悟っているが、未だ人間社会の匂いがする。この世界からも、肉体修行の目的で現象界に生まれてくる者は多い。それは、この現象界が、各世界を通じて最も大変な修行場であるため、自分達の霊域を高めようと、幽界人達が肉体修行を申請するからである。

六 地獄界

人生航路における修行結果の、不調和の想念に比例した世界として存在している。この現象界において、正しい人びとを恨んだり、そしったり、常に心の安らぎのない人びとがこの世を去るまでその意識を持ち続けると、その地獄で、悟るまで修行しなくてはならない。

この現象界の心の指導者は、アガシャー系グループにより構成されており、彼らは、実在界と現象界の支配者であり、大指導者である。

ゴードマ・シッターダー、イエス・キリスト、モーゼは、上上段階光の大指導霊である。さらに、423人の上段階光の大指導霊（如来）、2万人近くの上段階光の指導霊（菩薩）、1億数千万人の光の天使が実在界におり、霊界・幽界の上段階天使達は更に相当数におよび、秩序正しい生活を送っている。この天使達により、地球上の環境は守護されている。

神仏と人間の関係は以下の如くである。まず、大宇宙体は神仏の体であり、神仏の意識は大宇宙体を支配している。私達の生活や地域も、大宇宙体の小さな細胞である。考えることや、いろいろの心の働きの一切は想念であり、意識の意志の働きである。この意識こそ、大宇宙体を支配している意識、すなわち神仏に通じているものであり、私達の心は、神仏の子としてその仏性・神性をもっている。

そして、実在界は、表面意識90%、潜在意識10%であるのに対し、現象界は、表面意識10%、潜在意識90%となっている。

我々は、輪廻転生している永遠の生命を持ち、神仏の命によって魂の修行をし、この現象界に、調和のとれた仏国土を築く使命を持って生まれてきた。人間は、いつか老朽化した肉体（原子体）と別れ、新しい光子体という乗り船により実在界に帰らなくてはならない。我々の意識、すなわち魂と肉体舟は、霊子線ともいうべき魂の緒によって結ばれている。したがって、肉体舟が健全な間は、必ず霊子線によって魂と接続されており、それ故に、あの世へもこの世へも自由に行けるのである。

しかし、多くの人々は、肉体舟に乗ってしまうと、その意識が90%も潜在化してしまうので、人生の苦しみを自分で作りだして、その結果を直接受けるようになる。人間は、修行のために出てきていながら、煩惱に支配され、人生航路の方向をしばしば変えてしまう場合が多い。

人間は、本体を中心に5人の分身から成り立っており、その構成は以下の通りである。(一)本体が男性で、分身が5人男性(二)本体が女性で、分身が5人女性(三)本体が女性で、分身が2名女性、3名が男性(四)本体が男性で、分身が2名男性、3名が女性。

それぞれの間には、修行を助けるために守護霊と指導霊がついている。守護霊とは、魂の兄弟（本体1人、分身5人）の1人で、ほとんど専属的について守っている霊である。

6人のうち、1人が現象界に出ている場合は、他の5人は実在界に残っている。したがって、ある人の生活史を調べようとするなら、その人の守護霊から聞けば分かる。しかし、聞きだす者の意識が相手方より低いとそれは不可能になる。というのは、あの世の意識界は、自分の意識より下位の者の意識は見えても、上位の者の意識をのぞくことはできないからである。

指導霊は、主としてその人の職業なり、現象界の目的使命に対して、その方向を誤らないよう示唆を与えてくれる魂の友人あるいは先輩である。たとえば、医者として過去世に経験のない者が今世で医者となった場合、その人の心の調和度により、より高級な指導霊がついて示唆を与えてくれる。なお、

魂が上段階に進むと、守護霊が指導霊となったり、指導霊が守護霊に回ったりする。

守護・指導霊は、現象界で表面意識の10%で修行している者の、潜在意識層の90%の領域に絶えず入ってその人を守り、指導している。このように、現象界の人間にとって、一番身近にいる魂の兄弟たちに常に感謝し、「祈り」という調和された想念と行為を怠らないならば、その人の一生は、真に安らぎのあるものとなる。反対に不調和であると、守護霊は、その人を守ることができず、それが長期にわたると不幸を招くことになる。

人間の精神構造は、心を含めて90%の潜在意識、想念帯、10%の表面意識からなる。想念帯は、潜在意識と表面意識がまざり合った世界であり、そこには、各人の過去世、前世、あの世での生活の記録と、現象界、つまり後天的経験のすべてが記録されている。

GLA で言われる霊道が開いた（心の窓が開いた）ということは、天使の光が人の意識に入ったということであり、同時に、内からの光が外に出たことを意味する。想念帯に窓が開く場合の典型が霊道である。それを普通は霊能といい、超能力が身についたりする。しかし、この状態にも段階がある。内在されていた偉大な魂の智慧の湧出する可能性があるが、この世は表面意識に大部分が委ねられているため、表面意識の作用と想念帯の振動で本人に欲が生じ、威張ったり、金儲けの手段に使ったりすると危険なものとなる。

守護霊は、その人から離れる際に、その想念帯の開いた部分をふさぐが、そのすきに動物霊や魔王が入ってくる。おごる気持は、こうした動物霊や魔王と同通し、その人の意識がこれらを引き込む。これらのことから、霊能そのものは、悟りへの一過程にすぎないことが分かる。

神理を悟って生活している人々の中から生じる霊道者は、観自在力を得、正法の証明者として活躍している。¹⁸⁾彼らが霊的現象を現わすことが可能な

18) 正法とは、大自然の法則と、人間の心と行ないの法則が調和された道をいうとされる。

のは、心が調和されることにより、守護・指導霊が教えるためでもある。

我々は、生まれによってではなく、神理に即した心を持って、日々の生活行為をするかしないかで、聖者にも非聖者にもなる。霊道者には異言が生じるが、それは、過去世の言葉で、転生輪廻の事実を証明するものとされる。

異言に関しては、新約聖書の使徒行伝第二章に同じ現象がでていとされ、転生輪廻については、仏教でも証明されているとされる。華嚴經十地品の中に、日々の生活修行の中で心を調和させることにより、神理を悟り、自分の輪廻転生の過去を知ることができると記されているという。

あの世とこの世の事柄は、信次達のような霊能者が神理を悟ることにより、表面意識と潜在意識のダイヤルが一致して、神仏に通じる心の扉が開かれたため、解明することができるようになったのである。

信次のような霊能者は、地球上の環境を守護している天使達と話をすることも、その姿を霊視で見ることにもできる。なお、神罰・仏罰を与えるというような神仏を信じてはならない。なぜなら、本物の神仏や光の天使たちは、絶対に人間に罰を与えるというようなことはしないからである。罰は、自分自身の不調和な想念と行為が作り出したものであって、その原因はすべて自分自身にある。

光の天使達は、霊能者の心の調和度に比例して力を出すことができる。したがって、霊能者は、神理を悟り、毎日の生活自体を正しく生きるように勤めることが必要である。

宗教の世界で行をするというと、滝に打たれたり、山中で肉体行をすることだと思っている人が多い。ところが本当は、人間らしく生活する中で、魂の修行を行なうことが人間の使命なのである。煩惱は、心の中に芽生えるもので、不調和な想いや行為に打ち克つことのできる生活が本当の修行である。

そして、信次は、仏教もキリスト教も、今こそゴータマやイエスの教えの当時に、返ることが必要であるとする。仏教もキリスト教も本来の姿を変えられ、日々の生活に溶けこんではいるが、あまりにも形式化、行事化されて

その本来の生命を失っている。特に仏教は、智と意による解釈にかたより、情、すなわち「心」が失われている。

イエスの教えも、ゴータマの教えも、神理は一つである。ともに光の天使であり、人間としての心の中のあり方を教えていることは変わらない。我々は、正道、すなわち中道の生活を営むことにより、自分自身の価値を知ることが可能である。それにより、私達は心がいかに広大で、それぞれが神仏の子としていかに偉大であるかを悟ることができる。自己中心の愚かさを悟り、人間は一人ではないと考えた時、人は安らぎのある調和された存在に変わることができ、嘘のない生活が確立される。

人間の価値を忘れて不調和な人生を送っている人々は、心の安らぎがなく暗い想念に覆われている。だから、幸福をつかむ近道は、過去世で犯した業をしっかりと確認して、過誤のない人生を送ることであり、そのためには、常に反省する心を持って、自分の悪しき性格に打ち克つ必要がある。そのための反省の冥想とは、心を浄化し神仏の光によって覆われることである。これに対し、欲望を満たすための信仰は、祈れば祈るほど心が不調和となり、不幸な人生を送るようになる。神理に適った「八正道」の実践により、調和した正しい想念と行為、さらに、神仏の子たる自覚を持って、衣食住に足ることを知った生活こそ幸福への道である。

我々も、形式化した行事の中に埋もれ、心の故郷を失っている。現代社会の歪みは、資本主義と社会主義のいずれもが物質経済主義に陥り、仏性や神性を忘れ去っているところにある。

人間の人生航路の正しい進路こそ正法なのであり、ゴータマやイエスの時代に説かれた心の在り方、本来の人間の在り方に帰ることなのである。己自身が一切の苦しみから解放され、正法を実践することによって心の受け入れ態勢が整えば、過去世で学んだ無限大の智慧を悟り、調和のとれた安らぎの世界を、己の中に再現させ得るのである。

イエスも釈迦も後世において神格化されているが、実際は一般の子供と同

様に育てられ、ただその環境や現象に無常を感じ、苦悩の中から悟っていったのである。これは、人間のすべてがそうしなければならない現象界の定めなのである。

信次達も、イエスがナザレの丘やヨルダン川で神理を説き、ゴータマがインドで説法をした時のように、神殿や仏殿などは一つも祀っていない。それも、心の中に大神殿・大仏殿を持っているからとする。偶像崇拜もしないし、さらに、従来の新興宗教の行事のように、お経をあげたり祭祀をしたりして、いかめしさをよそおうこともしないのである。

ついで、人間の不幸と関連している悪霊に関しては、以下のような言及がみられる。まず、人間は、死の恐ろしさから肉体という魂の乗り舟に未練と執着を持つ。そのような現象界への執念が、地縛霊・浮遊霊などとなって、人間に不調和な現象を起こす。地縛霊は、交通事故現場、不慮の死を遂げた場所、自殺現場、戦死箇所、先祖伝来の執念の場、不調和なものを祀ってある場所等に生活していることがある。彼らの土地に対する執念に対して、彼らの住むべき正しい場所、あの世の教え、神理等を説いてやる必要がある。現象界での状態と同じ意識を持ってこの世を去った者は、生と死の間がはっきりと分らない。彼らに対しては、反省する方法を教えて心の曇りが晴れるようにすれば、即座に神の光によって覆われるため自ら悟るきっかけとなる。

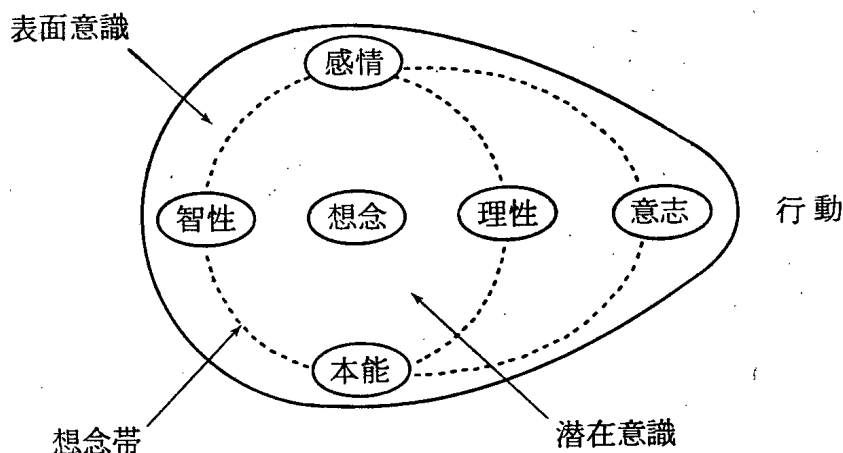
憑依霊とは、地獄におちた霊がその環境に耐えきれず、この現象界で生活をしていて、不調和な想念を持っている意識に憑依しているものである。彼らは、人々の意識の調和度によって、肉体から出ている後光（オーラー）の暗い箇所に所在を決めて憑依し、その部分が病気になっていることが多い。病気の80%近くは、憑依霊の仕業とされる。こうした憑依霊を除くには、その霊に対して憑依が悪であることを良く説得するとともに、憑依されている者も自ら正法に適った生活や心の持ち方を実践する以外に道はない。たとえ憑依霊を除いても、本人が正法に適わないなら、再び悪霊を呼びこんでしま

う。

また、先祖との関係は、こうして我々が肉体が与えられ、現象界に存するというのも、もとを正せば、先祖のたゆまざる調和への努力の結果とする。したがって、先祖に対して心から感謝するのは、人間として当然の義務である。しかし、先祖に対する供養とは、お経をあげることではない。死者の霊にもこの世にいた時と同じように、普通の言葉で人間としての正しいあり方を語って聞かせるのがよい。死者・先祖の最大の供養とは、地上界の子孫の実生活の調和である。イエスも釈迦も、先祖を拝めとは教えていない。良い戒名をつけよとか良い墓を造れとか、良い仏壇を造って祀れという先祖がいたら、我々は気をつけなくてはならない。実際、仏壇の中や周囲に祖先の霊がいるとしたら、困った現象である。

易・占いに関しては、それは正法とは、まったく関係がないとする。易・占いは、当たりはずれがあり、それ自体がその限界を示している。さらに、人の目的は魂の修行にあり、生年月日・占いで悪いという結果がでていても、必要があればあえて決行しなければならないこともあるわけである。

人間の心の一つの側面を図で示すと、円の中心に想念があり、左右上下に本能・感情・智性・理性・意志がある。表面意識と潜在意識は、想念帯とい



う想念が記録された壁でさえぎられている。表面意識と想念帯が浄化されると、心の内部の潜在意識が表面意識に流れ出し、過去世の言葉や記憶が再生されてくる。さらに、宇宙即我の境地は、心の根元部に表面意識がつながり、発現した場合に生じる。

人間は、高次元の世界から、自分で両親や環境を選んで、肉体先祖から継承されてきた肉体でもって、きびしい人生を体験する修行者なのである。人類は、皆同胞であり平等なのであり、やがては、共存共栄のユートピアを自らの手によって築くとされる。そして、かつて他の天体から地球へ移住してきた人類は、地球を調和ある世界にした後に、再び他の天体へ移住できる条件を築いていくのである。

4

高橋信次は、みずから神仏であると名乗る者を信じてはならないと言っている。そのためもあってか、死の直前まで、自己が何人であるか言明したことはほとんどなかった。しかし、多くの会員は、彼を釈迦の再誕とみなしていた。

その一例をあげると、かつて「生長の家」の幹部であり、シャーリープトラを過去世にもつとされる園頭広周は、信次によって霊道を開かれた時のことを以下のように記している。「私は高橋先生に向かって『ブッダ』と叫んでいた。あのなつかしさ、そのなつかしさ、このなつかしさに涙がとめどもなく流れてくる。その私の眼にはっきり見えるのは、『お釈迦さま』であった。『ブッダ……ブッダ……』。そう呼びながら、私はひれ伏していた。『そなたは二千五百年ぶりの約束をよく果たしてくれました。今生でも、あのインドの時と同じように正しい法を伝えて行きましょう。今生でこう会えてうれしいです』その声はまことにおごそかであった。……私が、高橋先生がかつてインドで釈尊といわれた方であることを、はっきりと霊眼で見た時のなつかしさはそれ以上であった。『ブッダ、ブッダ……』といてひれ伏して泣いている私の髪に金の粉が降ってきた。私はそれには気づかなかったが、私が

誘った宮崎の元『生長の家』の会員であった人から、『金が……』といわれて気がついた。なにもない空中から突然、金が降る。高橋先生の顔も、私の方にかざしておられたその手も、みな金である。その時思ったのは、釈尊の像を金箔で荘厳するのは、インドの時、お釈迦さまが説法をしておられると、空中から金が降ってきて、顔や手が金色に輝いたからであるということがわかった。¹⁹⁾

また、GLA 関西本部長であった中谷義雄は、以下のように記している。「9月12日に、私は東京へ行き高橋信次先生とお話しをさせて頂いて、この方が仏陀ゴータマの再誕であるということを堅く信じたのであります。それから二回三回と回を重ねて上京するたびに、さらにこの確信を強めました。」²⁰⁾「それと同時に、先生の体を通してモーゼ様がお出ましになり、信じられないような現象が起こったのであります。それは先生の口の中から、額から、頭髮の毛穴から、また手の毛穴から、無数の金の微粉が出てきたのであります。……これは物質化現象と申しまして、金という固体が液体になり、これが気体となって先生の体の中に入る。そして、それがまた毛穴を通して、汗または唾液という液体となって体外に出てもとの固体になり、金となるのだそうです。この日この現象をまのあたり見せて頂いたのであります。」²¹⁾

また、信次の最も古くからの弟子の一人であり、現在 GLA を離れている観音寺住職村上宥快は、以下のように記している。「恩師は釈迦の再来であることは分かっていたが、ご自分からそれを言葉で釈迦だとは言わなかった。しかし、それらの裏付けは、著書を見ても、言動によっても満ちあふれている。また、釈迦でなければ出来得ないことが数限りなく、現象を以って実証されている。……講演中まさに獅子吼されておられる時に口中より金粉が飛び散ったり、汗が乾くとその汗が金に変ってくるのである。この事実は

19) 園頭広周『現代の釈尊高橋信次師とともに』正法会出版部、1984年、38—39頁。

20) GLA 関西本部編集部編『高橋信次講演集』GLA 関西本部事務局、1975年、9頁。

21) 『同書』10—11頁。

多くの人びとの髪の中や着物や洋服に付着したことで証明されている。また、恩師の著書にも出てくるが、栃木県流山の研修で、他教団の人びとがスパイしていたが、その二人の心を見抜き、教祖の心中まで読みとってしまった。しかし、これらのことは恩師にとって余り珍しい現象ではない。』²²⁾

この金粉現象の実態がなんであるかは、推測の域を出ないが、筆者が接した信次生前からの中核的 GLA 会員は、ほぼすべてこの現象を目撃したと語っている。なお、この現象は、GLA 以外の霊能者においても生じるとされているものであり、信次のみにもみられるとされる現象ではない。²³⁾

さらに、園頭は、信次は、釈迦がもっていたとされる、天眼通・天耳通・他心通・宿命通・神足通・漏尽通の六神通をもっていたとして、以下のように記している。「私が正師を信じた最初は、私がはじめて正師の前に坐った時、私がこの世に生れてからその時まで、なにをし、なにを考えたかをすべて知っておられたからであった。正師が個人指導される場合は、その人が一番秘密にしている人に知られたくないと思っている出来事を、『あなたは何年何月何日、こういうことがありましたね』と指摘して、私には嘘は通じませんと知らして置いてから指導された。』²⁴⁾

以上、信次が有したとされるこれらの力に関して、筆者が接したほぼすべての会員が肯定している。いつも同程度の力が示されるわけではないが、時として発揮される信次の霊能力のすさまじさは、教団の内外を問わず、他の霊能者とは段違いのものとして帰依者に受けとめられている。

信次は、みずから釈迦であると明言することはほとんどなかったが、講演や霊道を開いたりする際に、インドではどうしたという発言をよくし、釈迦であるとの自覚をもっていたようである。そう思うに至った要因としては、モーゼとキリストが指導霊と守護霊であったこと。霊能者が信次を霊視する

22) 村上有快『調和への道』観音寺出版局、1985年、201—202頁。

23) 渡辺政治『霊媒』共栄書房、1981年、203—206頁にも金粉現象への言及がみられる。

24) 園頭『前掲書』94頁。

と、巨大な光の玉もしくは釈迦に見えることが多かったこと等があげられる。信次によって霊道を開かれた人は、「ブッダー」と言って彼に語りかけるケースが多かった。

さらに、信次には、教団の機関誌である GLA 誌に、ごく初期から掲載された『人間・釈迦』なる著述があるが、これは、信次の眼前に、当時の模様や情景が映し出されるのを、霊的な示唆と手の動きにしたがって書いたものとされる。この事実も、信次が釈迦の再誕であることのあらわれの一つとされている。

なお、ゴードマ・シッターダーの生命は、本体がゴードマ・シッターダーで、分身は、不空三蔵・天台智顛・伝教・空教・木戸孝允であるとされる。ゴードマ・シッターダーの分身は、ゴードマの前に、中インドに王様の子供として生まれている。ゴードマの前の生命は、リエント・アール・クラードと呼ばれ、南米のアンデス山脈の麓に生まれている。さらにその前の生命は、アトランテス帝国時代に、アガチャー大王として、神理を説いた人であったとされる。²⁵⁾

生前、多くの会員の前では、みずから釈迦であるとは明言しなかった信次は、1976年3月の白浜の研修会において、自己をエル・ランティーであるとした。これは、「白浜の覚り」とされているが、その内容は、GLA 誌に掲載された、「太陽系霊団の系図」によって知ることができる。²⁶⁾それによれば、信次は、大宇宙大神霊のもとにあるエル・ランティー（真のメシア）であるとされる。そしてアガチャー系（イエス）、カンターレ系（釈迦）、モーゼ系（モーゼ）は、エル・ランティーの光の分霊であり、ミカエルは、如来界の天使長であり、真のメシアの助力者であるとともに、ガブリエル・ウリエル・サリエル・ラグエル・パヌエル・ラファエルの長であるとされる。

エル・ランティーは、霊太陽として、太陽のようなエネルギーの塊りであ

25) 高橋信次『心の発見科学篇』三宝出版株式会社、1984年、196—197頁。

26) 『GLA 第6巻第7号』三宝出版株式会社、1976年、15—18頁。

り、その光がプリズムを通すと七色の光に変化する。七大天使は、七色の色がそれぞれ人格を持った姿であり、その長が七色の翼を持つ大天使ミカエルである。ミカエルは、如来界と宇宙界をつなぐ光の直系である。これらの大天使は、大指導霊であり、あの世とこの世を通して、エル・ランティーの力の直系として、人びとを導き魂の進化に力をつくしている。

アラーは、エル・ランティーの当時の別名である。イエスは、エル・ランティーを指してエホバと呼び、アガチャー系を形作っている。ブッダは、ブラフマンと呼び、カンターレ系を作っており、モーゼは、ヤハウエーと呼び、モーゼ系を作っている。

地上人類は、この三つの系列のいずれかに属し、イエス・ブッタ・モーゼを頂点に、ピラミッド型を示し、末広がりになっている。そして、各人の霊子線は、すべて神の光に直結しており、霊的には大天使を通してつながる。現代文化の源流は、現証（モーゼ）、理証（イエス）、文証（ブッダ）による正法の確立にあった。しかし、その背後には、エル・ランティーの光があり、それなくしては、ユダヤ教・キリスト教・仏教は実現しえなかった。

高橋信次の高次元の名がエル・ランティーであり、彼が説いた正法は、中道を軸に、慈悲と愛の調和のリズムにより生きることがを教え、その神理は、大宇宙が存在し、人間が生存するかぎり不変なものとされる。

このように、信次が死の直前に明らかにしたとされる「太陽系霊団の系図」が、いかなる経過によって成立したかは明らかでない。しかし、信次が、高橋佳子を後継者としようとしたことは、ほぼ確実である。

1977年3月、高橋佳子は、自己を大天使ミカエルとして位置づけた。さらに、仏教・キリスト教は、ローカルレリジョンとして、いわばその土地に根ざしたものであり、全世界に受け入れられにくい現状がある。これに対し、佳子の説く教えこそ、現状を超えうるグローバルなものであるとした。

さらに、佳子を書いたとされる『真創世記』には、以下のような宣言が記

されている。²⁷⁾

ミカエル宣言

天上より出でて、世界に散らばりし
 多くの天使たちは
 やがて至るべき日のために
 私のもとへ結集して来るであろう
 それはもはや さほど遠き未来のことではなく
 この数十年の間に、徐々に成されいくことなのである
 私のもとへ集い来り 語られる天使たちの普遍的神理は
 やがて久遠の宗教となり形づくられていくのである
 地上に出でたるあまたの光の天使たちよ
 ともに光あるあかつきの日のために
 己れをみがき 日々精進し道をきわめよう
 己れの心に忠実に 他人に寛容に ともに歩みよう
 見えない網の目のような糸が もうすでに
 はりめぐされている
 その糸を確実にたぐって
 集い来らねばならない
 この世に偶然なるものはないのだ
 すべては神のみ心のままに
 長き転生の中に結びつきたる友よ
 己れに気づき 立ちあがらねばならない

佳子は、ミカエルとして信次と一体であるとされ、さらには、信次は法の種をまき、ミカエルをこの地上界に送り出すことが、48年間肉体をもった目的であるとまでされた。²⁸⁾ そのうえ、信次は死ぬ前に、自分がこれ以上地上

27) 高橋佳子『真創世記地獄編』祥伝社、1983年、12—13頁。

28) 以下のミカエルに関する論述は、主として『ミカエル1977・8』GLA 総合本部出版局、

界にとどまれば、ミカエルの役割まで侵害してしまうと語ったとされる。

ミカエルは、主エル・ランティーの心臓部・頭脳部であり、非常に静かな、法として存在しているのがエル・ランティー。その意を受けて、実際に具現するのがミカエルの役である。神と主エル・ランティーとミカエル大天使は、三位一体である。信次の悟りが土台となって、そこから佳子の悟りが発展されていくという一貫した流れの中で、ミカエルが立つとき具現化が生じ、ものごとの本質が現われてくる。

ミカエルが、この世に肉体をもって姿を現わす周期は、三億六千五百万年とされ、イエス・モーゼ・釈迦は、ミカエルが最終ユートピアをつくるための露払いとして出てきた大指導霊であるとされる。ミカエル・佳子は、信次と同様に、雨・風のような天候をも自由に変えることができる存在とされる。そのうえ、信次が伊豆の海岸でイルカと話をしたのと同様に、佳子の愛の波動は、動物たちにも伝わるとされる。

この高橋佳子に関しては、GLA 誌の前身である「ひかり四号」に、霊道者の近況として以下のように記されている。「高橋佳子さん（13歳）東京都太田区在住。彼女は、お釈迦様の時代、すなわち印度時代に祇園精舎を寄贈した、須達長者の娘デルナーという女性でありました。日本ではヒミコとして約1900年前九州大和姓国で生れ、数多くの伝説を残しましたが、当時の関連の人達も霊道を開き、古代語で語り合っています。しかし、古代語では一般の人には分かりませんので、現代語で昔日の模様をいろいろ語ります。」²⁹⁾

これに対し、『真創世記地獄編』においては、彼女は中学二年の時初めて霊道が開き、「マリア観音」と名乗る佳子の魂の兄弟の一人が出現したとする。そして、信次がよく口にしていたのは、信次が48歳になった時、生死にかかわる出来事があり、その時に手伝ってくれる者が現われるということだった。

1977年。

『GLA 1977・9』GLA 総合本部出版局、1977年による。

29) 『ひかり4号』7頁。

ついで、高校三年の時、佳子にアポロンが出現し、それを通じて佳子は、アポロンが神話の中の神ではなく、光の大指導霊の一人であることを悟った。

信次は、以前から、「必ず、若い者が大人に法を説く日が来る」と語っていたが、1976年1月には、それが佳子ではないかと思い始めた。そして、2月に沖縄に講演会に行った時、佳子が大天使ミカエルであることが分かったとされる。ミカエルこそ信次の片腕であり、法の後継者であることを彼は、はっきり知ったのである。ミカエルは、信次の48年の人生に深く関与してきたのであり、彼は本当は三度死んでいるはずなのに、そのたびにミカエルが奇跡を起こして、死から守ったのである。そして、信次は、「あとは頼んだよ」という一言を佳子に残して、死んでいったとされている。³⁰⁾

5

高橋信次は、日本の多くの新宗教の教祖と同様にシャーマンの要素を有している。彼は、地球上のいかなる場所にも瞬時にして行くことができ、講演の際等の時、シャカ・イエス・モーゼが時に応じて入るとされている。その上、星洋子等を霊媒として用い、霊を入れたりもする。したがって、信次は、エクスタシー＝脱魂（魂の旅）とポゼッション＝憑霊（霊の憑依）の双方を兼備し、さらに、^{きにか}審神者でもある霊能者として位置づけられる。³¹⁾

また、召命型・修行型という分類においては、召命型の要素の方が強いと言える。そのためもあってか、信次は、修行型の霊能者に対して否定的態度をとっている。

彼は、講演の後で、霊道を開くといって、異言を語らせ過去世を思い出させたり、憑依霊を取去ったりした。これは、いわばカリスマの証明とみなすことができる。これらの信次の行為が、どれだけ日本の宗教的伝統の枠にお

30) 高橋佳子『前掲書』84—118頁。

31) 佐々木宏幹『シャーマニズム—エクスタシーと憑霊の文化—』中央公論社、1980年、35頁。

さまるかはともかくとして、彼のカリスマは、単なる呪的カリスマではないと言えよう。

信次は、多くの著書を出しており、その中で自己の教理を展開している。それらを見ると、日本人の伝統的靈魂観を前提としている部分もあるが、そこにとどまっただけではない。とくに、祖先崇拜に関しては、子孫が調和ある生活をするのがなによりの先祖供養としているなど、注目すべきものがある。

これに関連し、霊友会系の瑞法会教団が、教団ごと GLA に帰依したのも重要な事象と言えよう。先祖供養と親孝行を教義の中心としている教団が、信次の著した物を、所与の教典となすに至ったのである。さらに、易や占いも乗越えなければならないとする点なども考慮の対象となる。これらを総合的に考察すると、脱伝統というカリスマの要件を満たしていると言えよう。

いわれのない差別を受ける存在であったため、アルキメデスの点に立ち得た信次は、既成宗教・新宗教を問わず、多くの宗教に批判的に接し、さらには、スピリチャリズムにも主体性を保ちつつ接した。その結果として形成された GLA の教義は、他の教団にはみられない独自性を有していると言える。

それは、仏教、日本人の靈魂観、キリスト教、スピリチャリズム等を構成要素とし、一つの統合体を形成している。

また、困難な人生を歩まざるを得なかった信次は、以下のような苦難の神義論にもとづく見解を展開している。まず、彼は、人間は高次元の世界から、自ら両親や環境を選んで生れてくるとする。人間は、ある時は国王の体験を、ある時は奴隷のようなきびしい体験をするが、それらは皆、自らの心を豊かにするための修行の過程なのである。

特に、実在界の大指導霊等が地上界に生れる時、人生に疑問を持ち、悟りやすい環境を選んで生れてくる場合が多い。信次の場合は、特にきびしい生活環境に生れてきたため、実在界の者達もはらはらとして見守っていたとされる。

信次は、苦難に富んだ人生の後、モーゼやイエス・キリストが指導霊や守護霊として出現したこともあって、自ら釈迦の再誕であるとの自覚を持つにいたった。すなわち、末法の世に、人類を救済すべく、キリスト以来二千年ぶりに出現した、光の大指導霊の肉化した存在として自己を位置づけたのである。

そして、死の直前において信次は、人類に最終ユートピアを実現させるため出現した、人類の祖であると共に、真のメシアである、エル・ランティエーとの自覚を持って天上界へと旅立ったのである。

信次は、人類はみな兄弟であり、平等であり、人種や身分によって人間の価値は決まらないことを生涯強調し続けた。そして、弱き者、障害を持った者等に対し、心からの共感と理解を示すと共に、人間の本当の価値と魂の永遠性を説き続けた。³²⁾

ついで、信次から長女佳子への継承に関しては、ウェーバーの理論における、カリスマ的資格を持つ者を指名する項があてはまる。佳子は、カリスマの保持者である信次により後継者として指定され、さらにその後、一定のカリスマ性を有している若手を中心とする講師達によって、積極的な支持を受けた。

さらに、教義上は別に位置づけられているが、実際には信次の長女であるから、カリスマ的資格は血の中にあるという観念にもとづく世襲カリスマの要素も否定できない。日本では、PL 教団の「おしえおや」が、官職カリスマとしての教義づけがなされている数少ない例であるが、そこでも実際には、世襲カリスマの要素がみられる。そして、GLA もその例外ではなかったのである。

佳子のイニシュアティヴによって始まったミカエル運動は、スター崇拜の要素を含んでいた。講演会場において、会員から佳子へ花束が贈呈されたり、

32) GLA では、乳児ホーム・孤児ホーム・老人ホーム等の慰問活動を行っていた。さらに、バザーを行ない歳末助け合運動を兼ねると共に、福祉活動の資金ともしていた。

「ビーバ・ミカエル」が唱えられたり、佳子の前へひざまづいて礼拝するようなことも行なわれた。さらに、ギターの演奏に合わせて、肩を組みながら合唱するというケースもあり、全体としてヤングの運動という色彩が強かった。

その運動の過程において、マスコミを利用することも試みられたが、十分な成果をおさめるには至らなかった。このようなさまざまな演出は、後継者決定時においては、他の教団においてもみられるものである。したがって、GLA の運動のみが例外的ケースを成しているというわけではないが、結果としては、年輩者を含むかなりの会員が教団を去るに至った。

このような教勢の衰退という結果が生じたのには、他にもいくつかの要因があげられる。まず、指摘すべき事項としては、信次が教団形成後、比較的短期間のうちに夭折したことがあげられる。そのため、GLA においては、十分な教団づくりがなされていなかったのである。それに関連し、霊道が開かれたことにより霊能者となった多くの弟子を、十分コントロールする体制が確立していなかった。真如苑が大教団となり得た要因の一つとしては、多くの霊能者を管理するシステムを完成したことがあげられる。これに対し、GLA は、対照的であったと言える。

信次が存命中は、彼のカリスマにより教団は統合されていた。しかし、その死後には、GLA 内に対立が生じ、年輩の講師の少なからぬ者が、それぞれ一派を立てて小教祖となるに至った。

このように、高橋信次というカリスマの生と死は、いくつかの帰結をもたらした。その存在は、日本宗教史上における一コマとして特記すべきものがあると言えよう。

付記：当論文を書くにあたっては、草稿を、西山茂・対馬路人・島蘭進の三氏にご一読願
い、有益な助言をいただいた。これらの人に対し、心から謝意を表したいと思う。